



2002春日井市民第九演奏会

とき 2002.12.1 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催 春日井市、(財)かすがい市民文化財団、春日井市教育委員会、2002春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中日新聞社

ごあいさつ



春日井市長 鶴飼一郎

本日は、「2002春日井市民第九演奏会」によ
うこそお越しくださいました。

今年もまた第九の調べを聴く季節となりました。
恒例となりました「春日井の第九」も今年で記念
すべき第10回目を迎えます。

この春日井市民第九演奏会は平成5年に市制50
周年を記念して初演されて以来、毎年多くの市民
の皆様方の参加をいただき、この時期に欠かすこと
のできないイベントとして定着してまいりました。
これもひとえに、春日井第九合唱団と春日井
市交響楽団の皆さんを始め、関係の皆様の多大な
ご尽力と熱意の賜ものと感謝申し上げます。

本市では、文化を通して自分らしく生きること
ができるまちづくりを目指しておりますが、こう
した市民の皆様による積極的な文化活動は、個
性と魅力ある文化のまち春日井を育していく大き
な原動力になると確信いたしております。

さて、毎年新鮮な企画で楽しませてくれる市民
第九演奏会ですが、今年は、指揮者にアメリカを
中心に世界各地で活躍されているジョアッキーノ・
ロンゴバルディさんをお招きし、ソリストにも国
際的に活躍されている方々を始め実力派の皆さん
をお迎えしております。

今年も残すところ一か月となりました。師走の
ひととき、市民の皆様とともにこうしてまた第九
の調べを聴きながら過ごせることを、大変喜ばしく
思います。新たなる年に思いを馳せながら、どうぞ
ごゆっくりお楽しみください。



2002春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学学監 三浦昌夫

市民が歌い、市民が奏で、市民が聴く一文字通
りの「市民の第九」です。その春日井市民の第九
演奏会も、春日井市制50周年を機にはじまり、今
回で10年を迎えることができました。これも、音
楽を愛し、春日井市の文化を愛する市民のみなさ
ーのいつに変わらぬご支援によるものと心から感
謝いたします。

春日井第九は、常に、新鮮で、挑戦的で、具体
的で、音楽的に高度なものでありたいと願ってお
ります。今年もまた、指揮者を外国からお招きし
ました。ニューヨークで活躍中のナポリ生まれの
イタリア人ジョアッキーノ・ロンゴバルディさん
です。イタリア・オペラのような感動的な第九を
ご期待下さい。ソリストも、実力派の方々におい
でいただきました。合唱団員は今年も200名を超
えています。オーケストラは、厳しい練習を重ね
てきました。

ロンゴバルディさん、並河寿美・児玉祐子・小
貫岩夫・片桐直樹のソリストのみなさまをはじめ、
ご指導いただいたトレーナーの先生方、賛助出演
のみなさまに厚くお礼申し上げます。

では、今年の掉尾を飾る春日井市民による「第
九演奏会」をお楽しみ下さい。

プログラム

Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN (1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125「合唱つき」

Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

第1楽章 アレグロ マ ノントロッポ, ウン ポコ マエストソ
1mov. Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章 モルト ヴィヴァーチェ
2mov. Molto vivace

第3楽章 アダージョ モルト エ カンタービレ
3mov. Adagio molt e cantabile

第4楽章 フィナーレ, プレスト-アレグロ アッサイ-レシタティーヴォ-アレグロ アッサイ
4mov. Finale,Presto - Allegro assai - Rezitativo - Allegro assai

指揮者
Conductor

ジョアッキーノ・ロンゴバルディ
Gioacchino Longobardi



ソプラノ Soprano
並河 寿美
Namikawa, Hisami

アルト Alto
児玉 祐子
Kodama, Yuko

テノール Tenor
小貫 岩夫
Onuki, Iwao

バス Bass
片桐 直樹
Katagiri, Naoki



Music director
音楽監督 都築正道
Tsudzuki, Masamichi

Sub conductor
合奏指導 加藤完二
Katoh, Kanji

Chorus conductor
合唱指揮 吉川 朗
Yoshikawa, Akira

水谷 朋子
Mizutani, Tomoko

滝沢 博
Takizawa, Hiroshi

管弦楽 春日井市交響楽団
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA



合唱 春日井第九合唱団
KASUGAI CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介

指揮者 ジョアッキーノ・ロンゴバルディ



華麗な指揮法とダイナミックな音楽作りで、いま、もっとも注目を集めているナポリ出身の指揮者です。7歳のジョアッキーノは、父からピアノを学びました。ナポリのサン・ピエトロ音楽院に進み、ピアノと宗教音楽と合唱指揮のディプロマを取り、ナポリ音楽院では作曲を専攻しました。ザルツブルクのモーツァルト研究所でカラヤンから指揮を学びました。その後、指揮者としてヨーロッパ各地に招かれ、1992年からはアメリカでも活躍。ナポリとスイスとアメリカで定期的に演奏会を開いています。

世界各地で指揮しながらも、現在、ニューヨークを拠点に、生涯の課題である18世紀のナポリ音楽の復活に取り組んでいます。春日井市民第九演奏会実行委員会の招きで初来日。

ソプラノ 並河 寿美



大阪音楽大学音楽学部卒業。専攻科・大学院オペラ研究室修了。門田泰子、田原祥一郎の両氏に師事。こうべ市民音楽祭大賞。全日本学生音楽コンクール大阪大会第1位。「フィガロの結婚」の伯爵夫人、「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージとドラベッラ、「カルメン」のミカエラ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」のサントウツッタなど多数に出演。さらに、ルーマニアのトルグ・ムレシュ市で開催された『冬の音楽祭』に「カヴァレリア・ルスティカーナ」(演奏会形式)のサントウツッタで出演。「第九」をはじめ、モーツアルトの「レクイエム」「戴冠式ミサ」「ミサ・ブレヴィス」。フォーレの「レクイエム」、オルフの「カルミナ・ブランナ」ほかのソリストをつとめる。現在、二期会会員。垂水区音楽協会、西宮音楽協会、神戸音楽家協会各会員。兵庫県立西宮高等学校音楽科非常勤講師。大阪城南女子短期大学非常勤講師。今年9月には、ヴェルディの「ドン・カルロ」のエリザベッタ役で出演予定。

アルト 児玉 祐子



大阪音楽大学音楽学部声楽学科卒業。1985年に関西二期会でオペラデビュー以降、オペラ歌手として様々な役柄にオリジナリティー溢れる的確な個性を演じ分け好評を博す。「コシ・ファン・トゥッテ」のドラベッラ、「ラインの黄金・ワルキューレ」のフリッカ、「ナクソス島のアリアドネ」の作曲家、「こうもり」のオルロフスキイなど、パートリーは30役に及び、特に1996年「カルメン」のタイトルロール・カルメン役では、高い歌唱力と優美な舞台姿で観客を魅了した。またソリストとしては「第九」「メサイヤ」「レクイエム」などをはじめとして現代作品の初演や各種演奏会でも幅広く演奏活動を続いている。1999年ドイツ歌曲による「演連コンサートOSAKA・児玉祐子メゾ・ソプラノリサイタル」を開催。その業績により平成11年度大阪文化祭賞奨励賞を受賞。現在・京都女子大学・大阪女子学園高等学校非常勤講師、関西二期会会員・理事、日本シューベルト協会会員、日本演奏連盟会員。

バス 片桐 直樹



京都教育大学音楽科卒業。東京芸術大学大学院オペラ科修了。1988年関西二期会オペラ公演《ドン・ジョヴァンニ》で、レボレッロ役でデビュー。歌唱、演技ともに高い評価を得る。関西二期会を中心に《愛の妙薬》《ラインの黄金》《フィガロの結婚》《蝶々夫人》《ラ・ボエーム》など、数々のオペラ公演に出演し、明るく気品のある声質と端正な音楽性、存在感のある演技力で好評を博す。年末のベートーヴェン《第九》のバリトン・ソロとして各方面で活躍している他、バッハの《マタイ受難曲》をはじめ、ヘンデルの《メサイア》、ヴェルディ《レクイエム》など、バロックから現代に至るまで、オラトリオや宗教曲などのソリストとして、著名指揮者やオーケストラとの共演も多い。先の「市民オケ・フェスタ in Kasugai: オペラってなに?」(8月25日)に《魔弾の射手》のカスパール役で出場。春日井デビューを成功で飾る。福島慶子、喜多村彪、木川田澄、中山悌一、原田茂生の各氏に師事。関西二期会会員。京都音楽家クラブ会員。相愛大学講師。



音楽監督
都築 正道

1940年名古屋市生まれ。名古屋大学文学部美学卒。関西学院大学大学院博士課程修了。「ワーグナー研究」で文学博士。現在、中部大学教授。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟理事長。朝日新聞音楽評担当。春日井文化フォーラム・企画運営アドバイザー。春日井文化懇話会会長。(財)かすがい市民文化・財団理事「オペラ・トーク」「ハイビジョン・オペラ・シアター」など、講演会やTVや雑誌でオペラの解説。「名古屋オペラ・サロン」主宰。主著『楽劇: 音と言葉の美学』(音楽之友社)。



コンサートマスター
練習指揮
加藤 完二

ヴァイオリンを尾島綾子・東儀幸各氏に師事。在学中より指揮を学び、卒業後関西二期会等で朝比奈隆氏他の副指揮を務めた。大阪音楽大学でのオペラ指揮を皮切りに、各地でオーケストラやオペラを指揮。特にアマチュアオーケストラのトレーニングは好評。ルーマニアの「第2回ディヌ・ニクレスク国際指揮者コンクール」入賞及び審査員特別賞受賞。6年後同国でオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」他を客演指揮し、海外でも評判を得る。伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団監督。クロフ室内管弦楽団主宰。



合唱指揮
吉川 朗

愛知教育大学音楽科卒業。同大学院(作曲)修了。第九指導は1987年の半田第九に始まり、ナゴヤシティ管弦楽団(現セントラル交響楽団)、一宮第九を歌う会、小牧第九合唱団など。NHKナゴヤニュースオーケストラ常任指揮者。

ピアノ伴奏(合唱団)
竹内 理恵



オーケストラ 春日井市交響楽団

市民オケである春日井市交響楽団は、「市民が演奏し・市民が聴く・春日井市民のオーケストラ」として、また、「春日井第九のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心いて、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称『カポ』(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。この8月には「2002市民オケ・フェスタ in Kasugai: オペラってなに?」に参加。オペラにも自信をつけてきました。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などの60名。私たちにとって、最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、クラシック音楽を好きになっていただくことです。そのため、「名曲の名演奏」を心がけています。これからも、愛環音楽連盟の一員として、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。(団長・花村浩克)



合唱 春日井第九合唱団

平成5年12月の春日井市制50周年は、市民の手によるベートーヴェンの「第九演奏会」の春日井初演によって盛大に祝われました。この演奏会を記念して作られたのが、「春日井第九合唱団」です。以後、毎年12月には、新しく募集した市民も加わって、220名を越すメンバーが常に新鮮なベートーヴェンの「第九交響曲」を歌い継いでいます。創立以来、ベテランの吉川朗先生をはじめ、多くの優れた音楽家の指導で、技術的にも、音楽的にも、完成度の高い「第九」演奏を心がけています。平成7年からは、年末の「第九」の本練習に入る前に、特別練習として数々の合唱作品に挑戦しています。また、愛環音楽連盟にも加入して、この9月に開かれた第4回愛環音楽祭で歌う「カルメン」の度胸試しとして、本年6月29日(土)に文化フォーラム春日井の交流アトリウムで上演しました。また、第10回となる今年の「第九」は、イタリアのロンゴバルディさんの指揮で、さらに美しいベルカントな演奏が出来るものと張り切っています。ご期待下さい。(団長・荒川昭代)

「第九」のお話

2002春日井市民第九演奏会
音楽監督 都築正道

1824年、この「第9交響曲」がウィーンのケルントナートール劇場で初演された時のことです。指揮台にお飾り的に立たされていたベートーヴェンは、もう全く耳が聞こえず、曲が終わったときの万雷の拍手にも気がつきません。見かねたアルト歌手のウンガー嬢が彼の袖を引いて聴衆の方に向けると、彼は初めてそれに答え、静かに頭を下げるのでした。初演は大成功でしたが、2週間後の再演は惨めな失敗に終りました。それ以後は、「難解であり技術的にも演奏不可能」を理由に、演奏会のプログラムに顔を出すことは滅多にありませんでした。そのベートーヴェンも世を去り、初演から20年以上たった1846年、この不遇な曲を改めて世に送り出したのは若き（33歳）ヴァーグナーでした。彼は自伝「我が生涯」で、その時の悪戦苦闘ぶりを痛快な思い出話として紹介しています。このヴァーグナーの話を読みますと、ベートーヴェンの第九交響曲が、当時の人々にどう評価されていたかを知ることができます。大衆からは前衛的な音楽であるとして不人気を誇り、楽団からは赤字の最高傑作として大変嫌われていたようです。また、ベートーヴェンの後に続くロマン派の作曲家たちが、この曲になにを見、なにを求めていたかも、良く分ります。

ヴァーグナーと『第九』

ドレスデン（ザクセン）宮廷指揮者の職にあったヴァーグナーは、この「第9交響曲」を年に一度の慈善演奏会で上演しようと企てました。そこで彼は、一般の音楽愛好家たちの無理解に対しては、匿名で『ドレスデン新聞』に熱狂的な上演歓迎の弁を載せ、また、専門の音楽家たちの頑迷さに対しては、『第9交響曲標題樂的解説』（1846年）を著して、文書による活発な啓蒙運動を展開したのでした。特にこの解説書は、「心情的理解の案内書」といっていいもので、「第9交響曲」の真価を熱っぽい口調で滔々と説いた情熱の書です（高木卓証・『評論・小説集ベートーヴェン』・音楽の友社参照）。

またその一方では、指揮者として完璧な上演を目指み、練習も徹底したものにしました。「作曲者のオーケストラ構想が天才的であったように、オーケストラの演奏もまた天才的でなければならぬ」として、低音弦のユニゾンのレシタティーブだけでも12回の特訓をした、と述べています。その結果、旧弊（きゅうへい）なドレスデンの王室管弦楽団の幹事たちがこぞって反対するなか、ヴァーグナーのたった一人の反乱による演奏会は、大衆の圧倒的な支持のもとに大成功を収めたのでした。

「これを機会として、自信をもって取り掛かったことを大成功に導く技術と能力が私にはあるのだ、と思うようになった」とヴァーグナーは書いています。彼のそれ以後の悪魔的ともいえる独断に満ちた行動を考えると、ベートーヴェンの「第9交響曲」に関わるこの事件が、彼の生涯において如何に重要な役割を果したかがよく分ります。

それ以降、「第9交響曲」は、オーケストラの演奏技術がさらに向上するにつれて、次第に正しい評

価を得ていきました。また、ロマン精神を抱く新しい世代の人々の登場によって「言葉を持った交響曲」が理解されやすくなったのも幸せなことでした。

最後の交響曲の最後の楽章の象徴的意味

ところで、「なぜ交響曲の終楽章に声楽を加えたのか」という疑問に対する答えですが、それはいろいろあることでしょう。ただ、答を直接出すことも大切ですが、ここで特に考慮にいれておいていいことは、この「第9番」が彼の最後の交響曲であり、その終楽章は、彼の一連の交響曲の最終楽章でもあるということです。

音楽史を少しのぞいただけでも、最後の交響曲の最後の楽章が（結果的にそうなったとしても）その作曲家の従来の交響曲の構成とは全く違った異質なものになっている例は意外に多いです。ブラームスの「交響曲第4番」の終楽章（パッサカリア）、ブルックナーの「第9番」の終楽章（は完成されなかつたので「テ・デウム」）、チャイコフスキーの「悲愴交響曲」の終楽章（アダージョ・ラメントーン）、マーラーの「交響曲第9番」の終楽章（アダージョ＝フィナーレ）と並べてくれれば、単なる偶然であるとしても、少々気になるところです。（無意識であっても）交響曲の絶筆となることを予感した作曲家が、その最後の作品の最後の楽章だけ、極めて前例のない破格なものに仕上げたことは、私たちに何か特別な（例えば、フロイト的な）感慨をもたらします。それは、ひょっとすると、後世の私たちに向けられた作曲者からの直接の「遺言」（マニフェスト）なのではなかろうか、と思えるのです。

特に、このベートーヴェンの「第9番」を聴くと、この終楽章こそ、正にベートーヴェンから後生の私

たちへ届けられた「メッセージ」であるような深い思いにとらわれるのです。例えば、その一例として、終楽章の長い序奏のあと、テキストとして用いられたシラーの詩が歌いだされる前に、バリトン・ソロがまるで宣言文を読むように朗唱する箇所を指摘することができます。「おお友人たちよ、このような調べではなく、もっと心楽しく喜びにあふれた調べを…」と歌うこの冒頭での呼び掛けは、シラーの詩を始める前にベートーヴェン自身が書き記した序詞です。この個人的な発言は、終楽章がベートーヴェンの「マニフェスト」（宣言文）であることをはっきりと現わしているといえます。因みに、このドイツ語の‘angenehmer’（もっと心楽しい）は、極めて宗教的な雰囲気を色濃くもった言葉であり、「福音の訪れ」といってもいい、喜びに満ちたものです。それは、「お休みなさい」"AngenehmeRuhe!"とか「よいご旅行を」'AngenehmeReise!'といった、願いと祈りに使われる言葉です。

シラーの『歓喜への頌歌』とベートーヴェン

ベートーヴェンが最後の交響曲の最後の楽章にテキストとして用いたのは、8節からなるシラーの詩『歓喜への頌歌』"OdeandieFreund"であるのですが、その中から人類愛を力強く賛えた詩句を自由に抜粋して再構成したものです。ベートーヴェンが、この詩に作曲しようと思っていたのは、彼がまだボンにいた1793年（23歳）のときだといわれています。「第9交響曲」の完成に先立つ31年も前のことになります。

その当時は、シラーの詩8節全部に歌を付け、通作歌曲として独立した合唱曲にしようと考えていたようです。しかし、「命名祝日」序曲（作品115）にこの合唱曲の流用を思ひたち、その時は、ある程度抜粋した詩の構成になっていたそうですが、この企ても実現しませんでした。結局、ベートーヴェンがとても長い間こだわり続けてきたシラーの詩は、やっとのことで最後の交響曲に生を受けることとなります。でも、それは、すべての人から祝福された誕生ではありませんでした。

現代詩としての『歓喜の頌歌』

ところで、当時の人々にとってこの詩は、大衆におなじみの宗教詩でも聖句でも古典詩でもない、彼らと同時代の詩人フリードリッヒ・シラー（Friedrich von Schiller, 1759-1805）の思想的な現代詩でありました。時の政権メッテルニヒの政策に反対する「危険なほどの民主主義思想が、宗教的な歌詞の中に入り込んだのである」（フリーダ・ナイト）といわれるほど、本質的には、政治的な主張を歌った

プロパガンダな詩であると考えられていました。このことが、当時のウィーンの人々に、この曲を「難解」なものと感じさせた原因のひとつでもあります。しかし、それ以上に、彼らが強い戸惑いを覚えたのは、絶対音楽である交響曲に声楽を加えたベートーヴェンの前衛的な音楽技法であったことは、後世のドレスデンの例を見るまでもなく、当然です。ベートーヴェン自身も、この試みは単なる暴挙にすぎず、完全に間違いであって「いつか純粋音楽の終楽章を書こう」と弟子のツェルニーに語ったということです。

なぜ、交響曲に声楽をくわえたのか

とはいっても、ベートーヴェンが、このことをどれほど真剣に苦慮していたかは疑問で、結局、この改作案は実現されずに終りました。実際には、彼は、最後の交響曲が失敗作のままに終わることを恐れず、あくまでも交響曲に声楽を加えることの必要性を主張し、最後までその主張を放棄しなかったのだ、とも考えられます。この曲には何か、人間として、作曲家として、社会に対して果さねばならぬベートーヴェンの「義務の念」といったものが強く感じられるからです。

ここで私たちは、次の挿話を思い出します。ある人が、シェーンベルクに尋ねました、「どういう訳でベートーヴェンは、「第9交響曲」を乱雑だといわれながらも、書きつけたのですか？」彼は言いました、「答は一つしか知らない。言わねばならぬことがあったからだ」。正に、その通りです。彼には、言わねばならぬことがあったのです。

作曲年代	1817年-1824年2月
初演	1824年5月7日ケルントナートール劇場
献呈	プロシヤ王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世
出版	1826年6月マインツ市ショット社。 総譜・管弦楽合唱パート譜・終楽章ピアノ版総譜出版
楽器編成	フルート・オーボエ・クラリネット・ファゴット（第4楽章でコントラ・ファゴットが加わる）。トランペット。第2、第4楽章にはトロンボン3が加わる）。以上各2。 ホルン4.ティンパニ（第4楽章にはトライアングル、シンバル、大太鼓が加わる）。 弦5部。ソプラノ、アルト、テナー、バリトン各ソロ。混声合唱
第1楽章	Allegro ma non troppo, un poco maestoso. (14')
第2楽章	Molto vivace. (11')
第3楽章	Adagio molto e cantabile. (16')
第4楽章	Finale. (28') [1'09']

'An die Freude' 対訳

内藤克彦 訳

An die Freude

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
5 Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Chor
Seid umschlungen, Millionen!
10 Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
15 Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja — wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
20 Weinend sich aus diesem Bund!

Chor
Was den großen Ring bewohnet,
Huldige der Sympathie!
Zu den Sternen leitet sie,
Wo der Unbekannte thront.

25 Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
30 Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Chor
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
35 Such' ihn überm Sternenzelt,
Über Sternen muß er wohnen.

Freude heißt die starke Feder
In der ewigen Natur.
Freude, Freude treibt die Räder
40 In der großen Weltenuhr.
Blumen lockt sie aus den Keimen,
Sonnen aus dem Firmament,
Sphären rollt sie in den Räumen,
Die des Sehers Rohr nicht kennt.

喜びに

喜びよ、美しい神々の火花よ、
至福の園の娘よ、
われらは炎に酔いしれて、
天上のものよ、きみの聖所に歩み入る。
きみの魔力は
流俗の厳しく分離したものを、再び結び合わせ、
きみのやさしい翼の休むところ、
すべての人が兄弟となる。

合唱
抱き合え、百千万の人々よ!
このくちづけを全世界に!
兄弟たちよーあの星空の上には
一人の慈父が住み給うに違いないのだ。

一人の友の友となる
大きな幸に恵まれた者、
やさしい女性をかち得た者は、
声を合わせて歓呼せよ!
そうだーただ一つの魂をでも
この地上で自分のものと呼べる者は!
それをなし得なかった者は、
泣きながらこのまどいから消え去るがいい!

合唱
この大地球上に住む者は、
共感を信奉せよ!
共感が、われらを星々へ、
あの未知なる存在の玉座へ導いてゆくのだ。

喜びを、万物は
自然の乳房から飲み、
善きものも悪しきものも、みな、喜びの
ぱらの道を追い求めてゆく。
喜びは、くちづけとぶどう酒と、
死の試練を経た友をわれらに授けた。
快樂は、虫けらに与えられ、
神の前に立つののは、智天使だ。

合唱
ひざまずくか、きみたちは、百千万の人々よ。
創造主を予感するか、世界よ。
星空の上に、神を求めよ、
星々の上に、神は住み給うに違いないのだ。

喜びは、久遠の自然の
強いばねだ。
喜びが、巨大な宇宙時計の
齒車を回し、
花々をつぼみの中から、
星々を大空の中からいざない出し、
天球を、観測者の筒の見知らぬ空間で
回転させているのだ。

Chor
45 Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
50 Lächelt sie den Forscher an;
Zu der Tugend steilem Hügel
Leitet sie des Dulders Bahn.
Auf des Glaubens Sonnenberge
Sieht man ihre Fahnen wehn,
55 Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

Chor
Duldet mutig, Millionen!
Duldet für die bess're Welt!
Droben überm Sternenzelt
60 Wird ein großer Gott belohnen.

Göttern kann man nicht vergelten,
Schön ist's, ihnen gleich zu sein.
Gram und Armut soll sich melden,
Mit den Frohen sich erfreun.
65 Groll und Rache sei vergessen,
Unserm Todfeind sei verziehn;
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

Chor
70 Unser Schuldbuch sei vernichtet!
Ausgesöhnt die ganze Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube goldnem Blut
75 Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut—
Brüder, fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
80 Dieses Glas dem guten Geist!

Chor
Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist
Überm Sternenzelt dort oben!

85 Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschworen Eiden,
Wahrheit gegen Freund und Feind,
Männerstolz vor Königsthronen—
90 Brüder, gält es Gut und Blut—
Dem Verdienste seine Kronen,
Untergang der Lügenbrut!

Chor
Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
Schwört bei diesem goldenen Wein,
95 Dem Gelübde treu zu sein,
Schwört es bei dem Sternenrichter!

合唱
星々が天空の壯麗な平原を
飛翔してゆくごとく、朗らかに、
兄弟たちよ、きみたちの道を進め、
喜び勇んで勝利に向かう英雄のごとく。

真理の炎の鏡の中から
喜びは探究者にほほえみかける。
美德のけわしい丘の上へ
喜びは忍耐者の道を導く。
信仰の光かがやく山頂には
喜びの旗がひるがえり、
打ち碎かれた棺の裂け目からは、
喜びが、天使たちの合唱の中に立つの見える。

合唱
勇気をふるって耐え忍べ、百千万の人々よ!
よりよい世界のために耐え忍べ!
あの星空のかなたで
偉大な神が報い給うのだ。

神々に人は報いることはできぬが、
神々に等しくあることはすばらしい。
悲しい人も貧しい人も名乗り出で、
喜ぶ人と喜びを共にせよ。
恨みと復讐は水に流そう、
われらの不俱戴天の敵を許そう。
涙が彼の胸をふさぎ、
悔恨が彼の心をさいなむことのないように。

合唱
われらの黒表は破棄しよう!
全世界は和解せよ!
兄弟たちよーあの星空の上で、
われらが裁くごとくに、神は裁き給うのだ。

喜びは、ワイングラスの中に泡立ち、
ぶどうの黄金の血と共に
蛮人は柔和を、
絶望は英雄的勇気を飲む—
兄弟たちよ、並々と注いだグラスがめぐり来らば、
きみたちの席から飛び立ちて、
泡を天に向かって飛び散らせ、
グラスをあの善い靈に向かって上げよ!

合唱
星々の渦巻きがたたえ、
熾天使の賛歌がほめたたえる、
あの星空のかなたの
善い靈に、グラスを上げよ!

重い悩みには不抜の勇気を、
罪なくして泣くところには救いを、
固い誓いには永遠を、
友と敵には眞実を、
玉座の前では男子の誇りを—
兄弟たちよ、たとえ財産と生命に関わろうとも—
いさおしには栄冠を、
いつわりのやからには没落を!

合唱
この神聖な輪をより固く結び、
この黄金のワインにかけて、
誓約に忠実なることを誓え、
あの星空の審判者にかけて誓え!

みんなで歌おう、春日井賛歌を…

<歓喜の歌>

作詩・なかにし札

1. あいこそかんきにみち
びくひ一かりさえぎる
くなんをこえてすすま
んかんきのいただき
ふみーしめたときわーれ
らはきょうだいせかいはひーと
つかんきのいただきふみー
しめたときわーれらはきょう
だいせかいはひーとつ

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気高き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ